

■肢体不自由のある子どもたち・知的障害のある子どもたちへの実践事例

肢・知併置校におけるマルチメディアDAISY図書の活用方法

東京都立鹿本学園

本多 桂子

はじめに

東京都立鹿本学園は、肢体不自由教育部門（小・中・高）と知的障害教育部門（小・中）、2部門5学部で構成される特別支援学校です。児童・生徒数は、肢体不自由教育部門172名、知的障害教育部門285名、合計457名（2020年5月1日現在）と、東京都内の特別支援学校で一番多くの児童・生徒が在籍している大規模校です。

本校は2014年の開校から、読書活動の推進を学校経営計画で示し、読書環境の整備や読書週間など、子どもたちの意欲を高める取り組みを、全校一丸となって実践しており、マルチメディアDAISY図書は、本校の読書活動の一端を担っており、言語能力の向上を目指した授業実践を展開する際の大きな力になっています。

本校の特色

本校は、人々と協調し豊かにたくましく生き抜くことができる確かな学力と自信を身につけさせ、共生社会をつくる人材の育成を目標にしています。

障害の程度・状態にかかわらず、言語の表現手段や文章表現の習得及び思考力・判断力を伸長させるため、前読書期の初期段階の指導から多読期・成熟読書期に至る段階的な指導を行うとともに、読書環境の整備やICT機器を活用した読書活動の拡大を図っています。

今年度の実践

今年度は、新型コロナウイルス感染症の予防のため、2か月の休校と分散登校があり、その間、本校ではすぐに校長のリーダーシップのもと、教職員全員が昔話や人気の絵本の読み聞かせ動画を作成し、オンラインで子どもたちの学習支援に取り組みました（著作権に配慮済）。また、伊藤忠記念財団より許可をいただき、マルチメディアDAISY図書のCDを、来校しなくても済むように、家庭へ郵送貸出して家庭学習に役立ててもらいました。利点としてネットにつなげる必要がなく、安定した動作で読書を楽しむことができ、たくさんの作品を視聴することができ

ました。

休校後、学校が再開されてからも大規模校である本校は、学校図書館を子どもたちへ開放することができませんでした。そのため、司書教諭が2週間20冊をまとめて学級へ貸出支援を行っています。本が大好きな子どもたちにとって学校図書館へ行き、自分で借りることが困難な状況は残念ではありますが、定期的に貸出を希望する学級が複数あり、子どもたちに好評です。担任にとっては、どうしても同じような傾向の本を選んでしまう、選書する時間を他の教材研究をすることができるなどのメリットがありますし、司書教諭にとっても、校内の子どもたちの読書傾向などの実態把握に役立ち、本の選書の参考にもなりました。

さらに、三密を避けるために、今後も継続してマルチメディアDAISY図書を学習へ積極的に取り入れていく必要を感じています。

そこで、毎年、全校で昼休み、給食時間前後などを利用し、マルチメディアDAISY図書を活用したお話会（以下、DAISYキャラバン）と称し、大型テレビによる集団視聴を継続展開しています。このDAISYキャラバンは両部門とも司書教諭が各教室を訪れる巡回型で行っています。全校への普及と啓発のために、教職員へDAISYの使用方法的説明や、作品リストの提供を行い、発

達年齢に応じた作品内容の選び方の助言を行う機会です。この機会に良さを知って自分でネットワーク上にある作品を、使用方法のマニュアルを見ながら授業で行ったりして工夫しています。これに伊藤忠商事より寄贈いただいたiPadを利用し、大型テレビでの集団視聴とiPadでの個別視聴をミックスさせて行うことで、両方の良さを担任に感じてもらうと実践しました。

<パソコンとタブレット端末の違い>

端末	パソコンと大型TV	タブレット端末
対象	集団に有効。	個別
準備	機器準備を要する。	準備はほぼ必要なし。
効果	友だちと一緒に読むことでの影響あり。集団の音読学習に効果的に使用できる。	自分のペースで読むことができる。1対1で対応もでき、個別学習に使用しやすい。家庭でも簡単に使用できる。

肢体不自由教育部門の小学部では、集団視聴、個別視聴のどちらも子どもたちには大変興味をもって視聴できた様子で、継続してマルチメディアDAISY図書を使用するきっかけになったようです。特にiPadでの使用は、本校ではあまり台数がなかったので実践する機会が少なく、視覚障害で見ることが得意でない子どもや落ち着いて見

ることが苦手な子どもにも教員とのやりとりをしながら、視聴することができたようです。

知的障害教育部門の小学部では、やはり大型テレビの集団視聴のほうが学習形態には合っている様子でした。iPadの個別視聴では操作方法を指導する必要があり、操作方法を理解している子どもは喜んで見ていました。

今後は小学部からiPadを使用する機会が増えてくることが予想されますので、マルチメディアDAISY図書の需要が高まってくるのではないかと思います。また、教員は授業に有効であると実感した場合には、自分で積極的に活用することが多く、人気のある絵本の10分以内の作品で、例えば『へんしんシリーズ』や『あいうえおにぎり』『パパンがパン』などを視聴してもらおうと学習への継続使用してもらえることがわかりました。

次に家庭への貸出でアンケート調査を行いました。(32家庭中有効回答21家庭)使用しての感想、操作の簡単さなど自由意見を含めたものです。使用した感想(楽しかったか)については80%の人が楽しかったと回答していました。

しかし、「操作が簡単だったか?」という質問ではむずかしい、少しむずかしいと回答した人が70%いました。貸出の際には、操作マニュアルを添

付しています。このマニュアルは、2014年から使用しているものです。

教員では、マニュアル使用で80%程度が理解できていたのに対して、家庭では操作のむずかしさが課題となっていました。また、Macしか扱ったことのない家庭もあり、Mac対応のマルチメディアDAISY図書の問い合わせもありました。

新型コロナウイルス感染症の予防のため、自宅待機などでテレワークする家庭が増えて、パソコンの使用が普及しているとはいえ、やはりまだまだ使いこなすことがむずかしい家庭も多いことや、スマートフォンしかないなどの家庭もありました。

今後マルチメディアDAISY図書を家庭学習で広めるには、操作マニュアルの簡素化、使用する際にもっと簡単に操作できるように工夫する必要を感じました。ただし、アンケート回答数が少ないため、今後も調査していく必要があると考えています。



おわりに

今後のマルチメディアDAISY図書の効果的な活用を考えていくうえで、紙媒体と連携させた意識的な取り組みと、教員への有効性のある作品紹介、ICTの充実などが本校では重要な鍵になっています。また、アフターコロナの世界では、家庭への啓発も必要性があることがわかりました。障害などで紙媒体や普通の大きさの本では読書すること

が困難な子どもたちにとって、自分で読む、聞くことを体験できるマルチメディアDAISY図書は、本にかかわることができるきわめて有効な機会だと考えます。学校や家庭での充実した学習につながることから、これからも読書への子どもたちの興味・関心を高める有効な手段として、マルチメディアDAISY図書がより充実していくことを期待しています。

